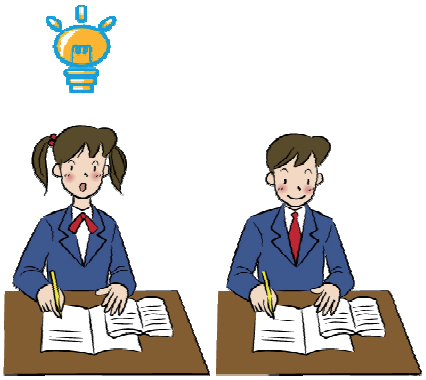
高等学校における
教科指導充実のために
【外国語科（英語）編】

栃木県総合教育センター　平成29年3月

変化の激しいこれからの社会を生き抜く人を育てるために、いま「思考力」の育成がますます重視されています。本パンフレットでは、これからの「思考力」を育むことを目指した高等学校における教科指導の在り方について紹介しています。

これから必要とされるのは「思考力」

平成19年の学校教育法改正によって、いわゆる学力の三要素が明確に示されました。それを受けて、現行の学習指導要領においても「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力その他の能力をはぐくむとともに，主体的に学習に取り組む態度を養い，個性を生かす教育の充実に努めなければならない」と定められています。このように習得と活用のバランスが重視されているところですが、高等学校においては授業及び学習評価が知識偏重型になりやすい傾向にあり、思考力等の育成に依然として課題が見られます。

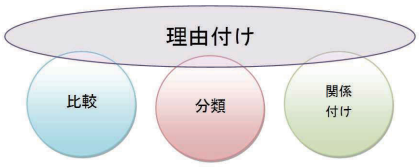


加えて、現代社会は急速な少子化・高齢化の進行による生産年齢人口の減少やグローバル化の影響等によって、日々激しく変化し、先を予測するのが困難になったり個人の力では解決できないような複雑化・多様化した問題に直面したりする場面が増えつつあります。そのような中で、いま教育の果たすべき役割にも変化が求められています。国では「育成すべき資質・能力を踏まえた教育の在り方」が検討されており、「何を学ぶか」だけでなく、「どのように学ぶか」「どのような力が身に付いたか」などの視点が重視されています。

これらのことを踏まえ、本調査研究では、これからさらに重要視されるであろう「思考力」の育成を、高等学校における教科指導の中でどう進めればよいのかをテーマに研究しました。

思考力を育むための「思考のすべ」

当センターでは、平成26・27年度に「思考力・判断力・表現力の育成に関する調査研究」を行いました。その中で、子どもたちが思考をするための技法として「比較」「分類」「関係付け」「理由付け」の四つを提案し、これらを「思考のすべ」と呼ぶことにしました。本調査研究においても、これを取り入れて思考力を育成する事例をいくつか紹介しています。「思考のすべ」についての詳細は、当センターのＷｅｂサイトを御覧ください。



栃木県総合教育センター「思考力・判断力・表現力の育成に関する調査研究（小・中・高）」
http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/shikouryoku_h26/index.html

事例１　１単元における思考力を高める指導の工夫①
～生徒の思考を活性化させる言語活動の充実～

事例の概要

〇本事例のねらい

本事例では、第２学年のコミュニケーション英語Ⅱにおける単元“Life in a Jar”（総時間数９時間）を取り上げ、スモールステップを踏んだ様々な言語活動（**実践１～実践５**）を実践することで、生徒の思考を活性化させることを目指した。具体的には、教師の発問やワークシートの作成において「思考のすべ」（分類、関係付け、比較）を意図的に用いることで、本文の内容理解を深めさせるとともに、「英語を用いて何ができるようになるか」という観点から、学んだ内容について生徒自身の考えを話させたり、書かせたりする場面を多く設定した。

〇単元名　Lesson　4　“Life in a Jar”

〇単元の目標

第二次世界大戦中にナチスに立ち向かいユダヤ人を救助したイレーナ・センドラー氏の功績と、彼女の活動内容を理解するとともに、「命」について考え、自分の意見を表現する。

授業実践

実践１（２時間目）

(1) 取り入れた「思考のすべ」とその意図：**分類（示された視点による分類）**

本文の内容を「事実」と「登場人物の気持ち（感情）」に分類する活動を通して本文の内容を整理させる。また、個人で分類した結果をペア同士で比較させ、なぜそう考えたかについて話し合うことで内容理解を深めさせる。

(2) 指導手順

① 本文を「事実」が書かれている部分と、「登場人物の気持ち（感情）」が書かれている部分に分類させる。登場人物の気持ちに分類する際には、誰の気持ちなのかを記入させる。

② ペアを作らせ、分類した結果を確認させる。

③ 分類結果が違った箇所について、そう判断した理由や根拠を話し合わせる。必ずしも正解は一つではないことを伝え、ペアの相手と答えが違っていた場合には、そう考える理由や根拠を話し合うように積極的に促す。

実践２（３時間目）

(1) 取り入れた「思考のすべ」とその意図：**分類（示された視点による分類）**

生徒は、前時（**実践１**）に本文を「事実」と「登場人物の気持ち（感情）」に分類することで概要を理解している。その上で、さらに本文の内容を「センドラー氏の行動」と「それ以外」に分類させることで、センドラー氏の功績に焦点を当てて本文の内容を整理させる。また、個人で分類した結果をペア同士で比較させ、なぜそう考えたのかについて話し合わせ、内容理解をより深めさせる。

(2) 指導手順

実践１と同様に、本文を「センドラー氏の行動」と「それ以外」の部分に分類させ、結果をペアで話し合わせる。

実践３（４時間目）

(1) 取り入れた「思考のすべ」とその意図：**関係付け（構造化）**

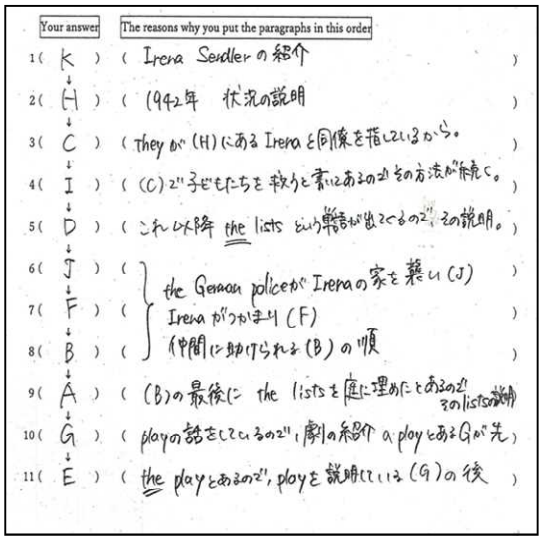
段落ごとにランダムに並べ替えられた英文を、内容やディスコース・マーカーなどを参考にして正しく並べ替える活動を通して、それぞれの出来事の関係性やつながりをより深く理解させる。また、ペアで話し合いながら互いの答えを確認することで、出来事の内容やその原因・結果についての理解を整理させ、センドラー氏の功績や人生全体について理解を深めさせる。

(2) 指導手順

① 教科書等を閉じさせ、英文を正しい順序に並べ替えさせる。その際に、順序を判断するヒントとなった語句に印を付けさせたり、そう考えた理由を書かせたりする。（**資料１**）

② ペアを作らせ、各自が並べ替えた結果を確認させる。

③ 並べ替えた結果が違った箇所について、そう判断した理由や根拠を話し合わせる。



資料１　生徒が記入したワークシートの一部

実践４（７時間目）

(1) 取り入れた「思考のすべ」とその意図：**関係付け（想像）**

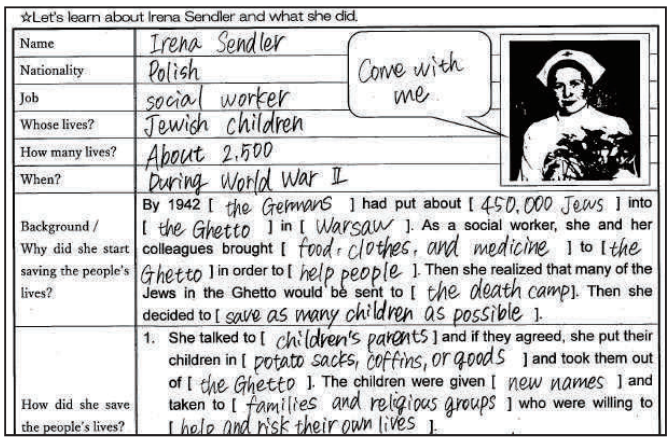
本実践が本単元でのメインの活動となる。生徒には、前々時（５時間目）に、センドラー氏の功績や活動内容をリテリングさせることで本文の内容を整理させ、前時（６時間目）には、人命救助に尽力した他の歴史上の人物について調べさせた。本実践では、両者の考えや行動を関係付けて、自分自身がセンドラー氏の立場に置かれた場合、どのような行動を取るかについて考えさせ、自分の意見を発表させる。

(2) 指導手順

① センドラー氏の功績についてまとめたワークシート（**資料２**）と、他の歴史上の人物についてまとめたワークシート（**資料３**）を見返しながら、自分がセンドラー氏の立場に置かれた場合、どのような行動を取るかについて考えさせる。

② 自分の意見とそう考える理由をワークシートに書かせる。（**資料４**）

③ ４人グループを作らせ、自分の意見を発表させる。

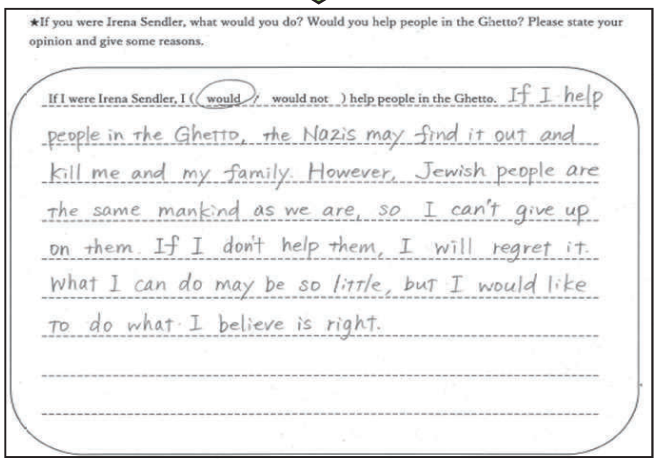


☆Let's learn about Irena Sendler and what she did.

Name	Irena Sendler
Nationality	Polish
Job	social worker
Whose lives?	Jewish children
How many lives?	About 2,500
When?	During World War II
Background / Why did she start saving the people's lives?	By 1942 [the Germans] had put about [450,000 Jews] into [the Ghetto] in [Warsaw]. As a social worker, she and her colleagues brought [food, clothes, and medicine] to [the Ghetto] in order to [help people]. Then she realized that many of the Jews in the Ghetto would be sent to [the death camp]. Then she decided to [save as many children as possible].
How did she save the people's lives?	1. She talked to [children's parents] and if they agreed, she put their children in [potato sacks, coffins, or goods] and took them out of [the Ghetto]. The children were given [new names] and taken to [families and religious groups] who were willing to [help and risk their own lives].

Come with me

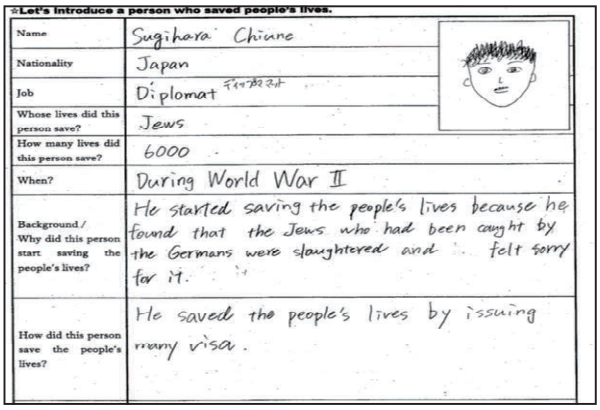
資料２　センドラー氏についてまとめたワークシート



★If you were Irena Sendler, what would you do? Would you help people in the Ghetto? Please state your opinion and give some reasons.

If I were Irena Sendler, I (would / would not) help people in the Ghetto. If I help people in the Ghetto, the Nazis may find it out and kill me and my family. However, Jewish people are the same mankind as we are, so I can't give up on them. If I don't help them, I will regret it. What I can do may be so little, but I would like to do what I believe is right.

資料４　生徒の意見



☆Let's introduce a person who saved people's lives.

Name	Sugihara Chiune
Nationality	Japan
Job	Diplomat
Whose lives did this person save?	Jews
How many lives did this person save?	6000
When?	During World War II
Background / Why did this person start saving the people's lives?	He started saving the people's lives because he found that the Jews who had been caught by the Germans were slaughtered and felt sorry for it.
How did this person save the people's lives?	He saved the people's lives by issuing many visa.

資料３　他の歴史上の人物についてまとめたワークシート

実践５（８時間目）

(1) 取り入れた「思考のすべ」とその意図：**比較（検討）**

生徒には、本単元の最初の授業で、英文を読む前に本単元のタイトルである“Life in a Jar”が表す意味を推測させ、それが本単元を通してのBig Questionであることを伝えてある。本文の内容理解が終わった後で、再度タイトルの意味を考えさせ、最初の授業で推測したものと比較することで、本文の内容に対する理解度がどれだけ高まったかを認識させる。

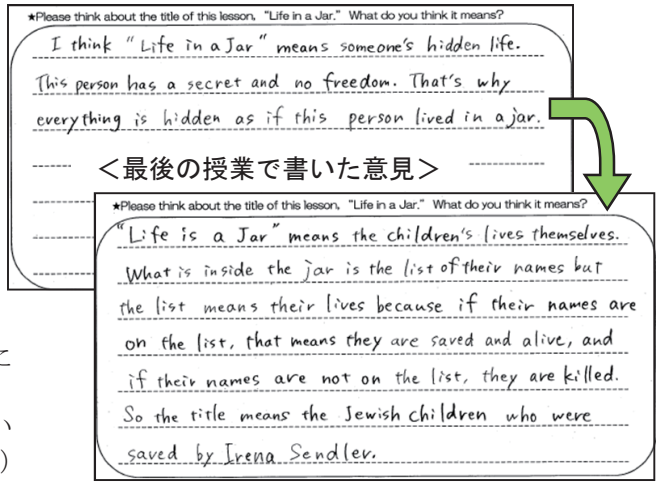
(2) 指導手順

① 本単元の最初の授業で、本文を読む前に、タイトルの意味について推測させ、ワークシートに考えを書かせる。

② 本文の内容理解が終わった際に、再度タイトルの意味について考えさせ、最初の授業で書いたことと比較させる。（**資料５**）

③ ４人グループを作らせ、自分の意見を発表させる。

＜最初の授業で書いた意見＞



★Please think about the title of this lesson. "Life in a Jar." What do you think it means?

I think "Life in a Jar" means someone's hidden life. This person has a secret and no freedom. That's why everything is hidden as if this person lived in a jar.

＜最後の授業で書いた意見＞

★Please think about the title of this lesson. "Life in a Jar." What do you think it means?

"Life is a Jar" means the children's lives themselves. What is inside the jar is the list of their names but the list means their lives because if their names are on the list, that means they are saved and alive, and if their names are not on the list, they are killed. So the title means the Jewish children who were saved by Irena Sendler.

資料５　ある生徒の考えの変容

成果

本事例では、生徒の思考を活性化させることを目指し、一つの単元において**実践１**から**実践５**までのスモールステップを踏んだ実践を行った。大きな枠組みから徐々に小さなものへと活動内容を移したり、本文を読む際の視点を変えたりと、段階を踏んだ様々な活動を取り入れることにより、生徒の思考が徐々に深まるように活動内容や活動の順序を工夫した。実践を通して、生徒は様々な「なぜ」を考え、教科書の英文と何度も向き合うこととなり、授業後の生徒の感想には「多くの活動を通して、誰が何をしたのかや出来事の順番などを自然と覚えることができた」などの記述が見られた。また、ペア・ワークやグループ・ワークを重ねるごとに、学んだ内容や表現について自然と使えるようになっていく様子も見られた。様々な活動を通して生徒は「思考のすべ」を使用して、より深く英文と関わり、そのことで学んだ内容がより生徒の記憶に残ったのではないかと考える。

事例２　１単元における思考力を高める指導の工夫②
～スモールステップを踏んだ指導の実践～

事例の概要

〇本事例のねらい

本事例では、第２学年のコミュニケーション英語Ⅱにおける単元“Inspired by Nature”（総時間数９時間）を取り上げ、スモールステップを踏んだ様々な言語活動（**実践１～実践３**）を実践することで、生徒の思考力を育成することを目指した。具体的には、知識構成型ジグソー法や「思考のすべ」（関係付け）を意図的に用いた言語活動を展開することで、本文の内容理解及び生徒の思考力を高めることをねらいとした。

〇単元名　Lesson　7　“Inspired by Nature”

〇単元の目標

生物の構造や機能を模倣して新しいテクノロジーや製品を生み出すバイオミメティクスの研究事例を通して、生物がもつ驚くべき能力について理解するとともに、読んで得た情報を参考に、バイオミメティクスに関する独自の事例を考える。また、資源の枯渇や環境破壊など、人類が直面する課題を意識する。

授業実践

実践１（１時間目）

(1) 取り入れた思考力育成を目指したすべとその意図：**知識構成型ジグソー法**

本単元で学習するバイオミメティクスの考え方を用いて、生物の形や機能と人類が直面する課題を関係付けて考えることにより、本文の概要を理解する。そこで、本実践では、知識構成型ジグソー法を活用して授業を展開することにした。知識構成型ジグソー法では、あるテーマについて異なる視点で書かれた複数の資料をエキスパート班に分かれて読み、次に各エキスパートを一人ずつ組み合わせたジグソー班で、それぞれが持ち寄った知識をジグソーパズルのように組み合わせることによって課題を解決する。本実践ではテーマを「バイオミメティクスの考え方を用いて、与えられた課題が解決できるようなデザインを考える」こととした。

(2) 指導手順

① 本単元の中に登場するバイオミメティクスの例（レオナルド・ダ・ヴィンチがトンボから発想を得て描いたヘリコプターのスケッチ）を用いて導入を行い、全員にバイオミメティクスの考え方を理解させた後、本実践のテーマを提示する。なお、本文中にデザインの例が載っているので、予習をしないように指示しておく。

② 生徒を４人組のグループに分け、このグループをエキスパート班とする。さらに、エキスパート班をScientists（AとB）、Engineers（CとD）の二つの立場に分け、A、BそれぞれのScientistsには「カワセミ」についての異なる英文を、また、C、DそれぞれのEngineersには「新幹線（の騒音）」についての異なる英文を与える。

③ 各班で与えられた英文を読み、Scientistsがもつ情報（カワセミの特徴）と、Engineersが抱える課題（新幹線の騒音）を各自で把握させる。班内で全員が共有できるように、分からないところはメンバー間で話し合うように指示する。英文の内容をイメージしやすいように、各班にカワセミと新幹線の写真を与える。

④ **図１**のように、エキスパート班からジグソー班に分かれ、Scientistsがもつカワセミの特徴と、Engineersが抱える課題を英語で伝え合い、交換した知識を統合して、新幹線の騒音に対する解決策を理解させる。

⑤ ジグソー班での情報の統合が行われたら、本実践のテーマである「バイオミメティクスの考え方を用いて、与えられた課題が解決できるようなデザイン」を考えさせ、班内で自分の考えたデザイン（**資料１**）を発表させる。

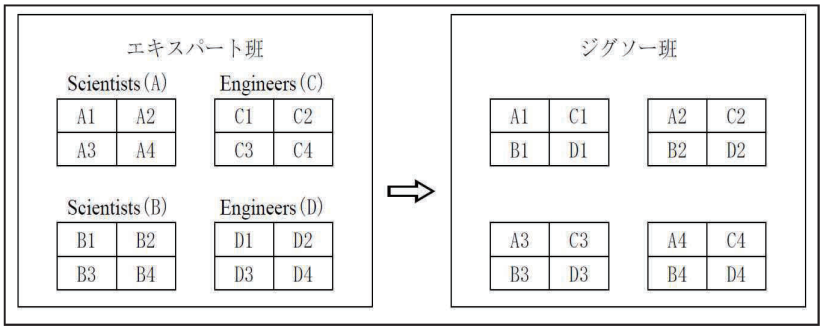
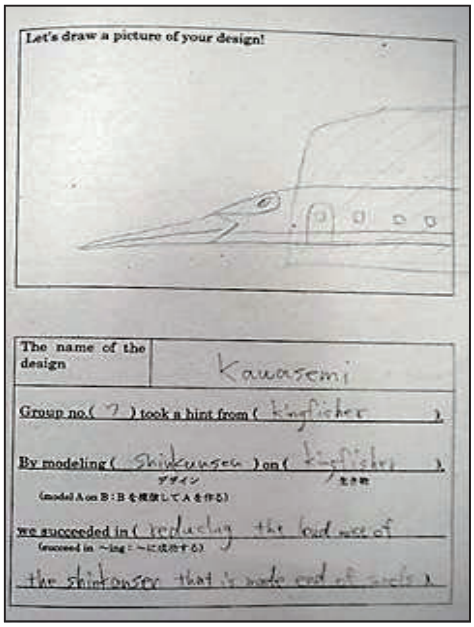


図１　エキスパート班とジグソー班の構成



資料１　生徒が考えたデザイン例

実践２（２時間目）

(1) 取り入れた「思考のすべ」とその意図：**関係付け（類推）**

本単元のPart２は「蓮の葉の特徴」と「壁などの汚れ」との関連に関する内容で、その導入において、**実践１**同様にScientistsとEngineersのそれぞれの視点を関係付けて、課題を解決する独自のデザインを考えさせる。本実践は、前時の活動を応用しつつ、より多くのインタラクションの時間を確保するためにペア・ワークで行う。なお、本実践で与えるテーマは、**実践１**と同様に「バイオミメティクスの考え方を用いて、与えられた課題が解決できるようなデザインを考える」とする。同じテーマとすることで内容理解の定着を図ることがねらいである。

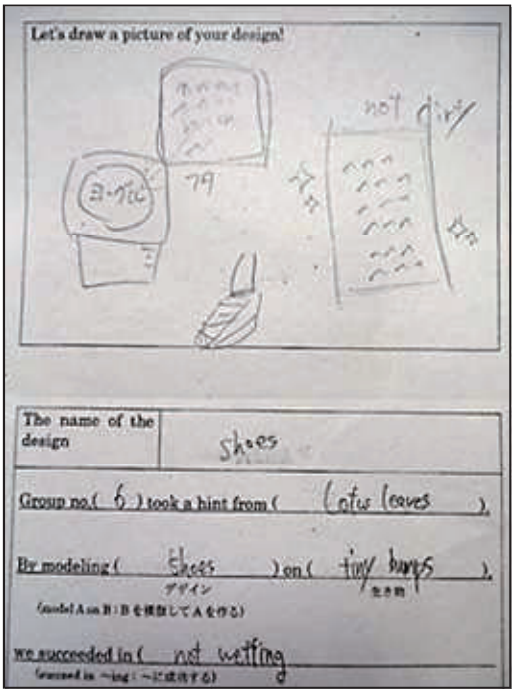
(2) 指導手順

① 生徒をペアにして、「蓮の葉」と「壁などの汚れ」に関する英文プリントを読ませ、Scientistsがもつ情報（蓮の葉の特徴）とEngineersが抱える課題（壁の汚れとヨーグルトのふた裏について）を把握させる。

② Scientistsがもつ情報とEngineersが抱える課題をペア同士で英語で伝え合い、交換した知識を統合して、壁の汚れなどの解決策を推測させる。

③ お互いの知識を統合した後、本実践のテーマである「バイオミメティクスの考え方を用いて、与えられた課題が解決できるようなデザイン」を各自で考えさせ（**資料２**）、ワークシートに記入させる。

④ 記入が終わったら、ペア同士で自分の考えたデザインを発表し合う。



資料２　生徒が考えたデザイン例

実践３（８時間目）

(1) 取り入れた「思考のすべ」とその意図：**関係付け（構造化）**

本実践は、本単元の本文を一通り読み終わった後に既習事項の復習として実施する。ScientistsとEngineersの両方の立場を関係付けて課題の解決を図るという本文の内容に関する理解度を確認するとともに、学んだ内容を自分の言葉で言い換える活動を行う。今までの実践ではScientistsとEngineersのどちらかの立場に立って考えたが、ここでは両方の視点を関係付けて、今までに学んできた生物のもつ特徴と人類が直面する課題を整理するまとめの活動となる。

(2) 指導手順

① 実践を行う前に、ワークシートを用いてScientistsとEngineersの視点から本文全体について英語でまとめさせる。

② ４人組のグループを作らせ、写真を全て裏側にして、トランプの神経衰弱の要領で進めさせる。（**図２**）

「カワセミ」と「新幹線」など関連する写真（**図３**）を２枚めくることができたら、それについて英語で説明する。キーワードとなる単語を写真に貼っておき、生徒はその単語を使いながら英語で説明をする。全てのキーワードを用いて、２枚の写真を関連付けて説明することができたら、その２枚を手元に置ける。最後に最も多く写真を持っている者が勝者となる。

図２　活動の様子

図３　使用した写真

成果

実践１は、単元の導入の段階でのアクティブ・ラーニングを意識した取組であったが、実践後に生徒に書かせたアンケートによると、93%の生徒が「バイオミメティクスの大まかな内容が理解できた」と回答しており、予想以上にねらいが達成できたと考える。アンケートの感想からも、各自に異なる役割を与え、それらを関係付けさせたことが生徒個人の「考える」活動へとつながっていったことがうかがえる。

実践２は、**実践１**を踏まえた活動であり、ペア・ワークで実施したため、各自のインタラクションの時間が増え、より多くのアウトプットを引き出すことができた。また、同じテーマで実践したため、内容理解も深まった。

実践３では、学んだ内容の定着活動としてゲーム的な要素を取り入れたリテリング活動を実施した。ここでも、前時に本文内容をまとめるというスモールステップを踏んだため、生徒は戸惑うことなく積極的にアウトプット活動に取り組むことができた。

今回の実践を通して、生徒の思考力を高めることを目指した授業においては「生徒が自ら考え、取り組む場面」をいかに設けるかが重要であると感じた。本事例では、知識構成型ジグソー法や「思考のすべ」を用いた授業展開を実践したが、教師側が何をねらいとし、そのためにどのような発問をし、どのような活動を生徒に求めるかということを念頭に置いて授業を構成する必要があると考える。

事例３　「思考のすべ」を使用して読解を深める指導の工夫

事例の概要

〇本事例のねらい

本事例では、ただ英文を読むだけではなく、主張や説の背後にある理由や、文中には明言されない事柄に目を向けることで、教科書本文の内容をより深く理解させることを目指した授業実践を行った。本文を読み、書かれている事実だけを読み取るのではなく、文中に出てくるキーワードを年表にまとめたり、本文には明示されていない、ある課題に対する解決策の理由を考えさせたりすることで、生徒が深く思考する場面を意図的に設定した。その際に、「思考のすべ」（比較、関係付け）を用いて、生徒がこれまで学習してきた知識を振り返り、活用することができるような発問やワークシートを工夫することを心掛けた。本事例では、第２学年のコミュニケーション英語Ⅱにおける複数の単元で実施した**実践１**から**実践３**を紹介する。

授業実践1

〇単元名　Lesson　3　“Origami Is Not Just a Piece of Paper!”（総時間数７時間）

〇単元の目標

折り紙の歴史を述べた英文を時間の流れに沿って読むとともに、身近な遊びである折り紙が世界の様々な場所で発展してきたこと、また、科学技術の様々な分野で活用されていることを理解する。

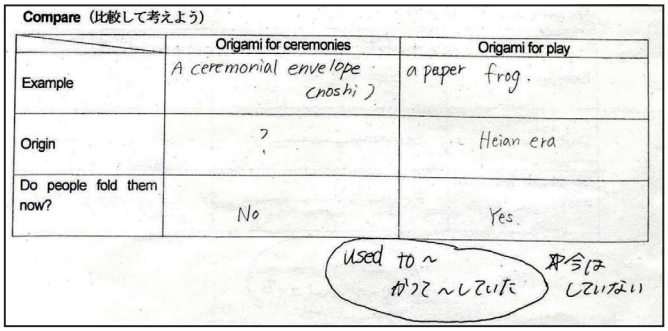
実践１（２時間目）

(1)　取り入れた「思考のすべ」とその意図：**比較（示された視点による比較）**

折り紙の目的（儀式と遊び）について、三つの視点（具体例、起源、現在でも作られているのかどうか）を与えて比較させることで、文中には明示されていない事柄に目を向けさせ、本文の内容を掘り下げてより深く理解させる。

(2)　指導手順

① 内容理解ワークシートを使い、Part１の本文内容を確認させる。
② ペアでワークシートの表（**資料１**）を完成させる。
③ 「儀式」としての折り紙が現在でも作られているかは本文に明示されていないため、既習事項の“過去の習慣を表すwould（often）やused to”を提示し、「過去」と「現在」の関連を問いかける。
④ ペア同士で表に入る言葉を確認し合い、その理由を共有させる。



Compare（比較して考えよう）

	Origami for ceremonies	Origami for play
Example	A ceremonial envelope (noshi)	a paper frog.
Origin	?	Heian era
Do people fold them now?	No	Yes.

used to ~ かつて～していた　今は していない

資料１　生徒が取り組んだワークシートの表

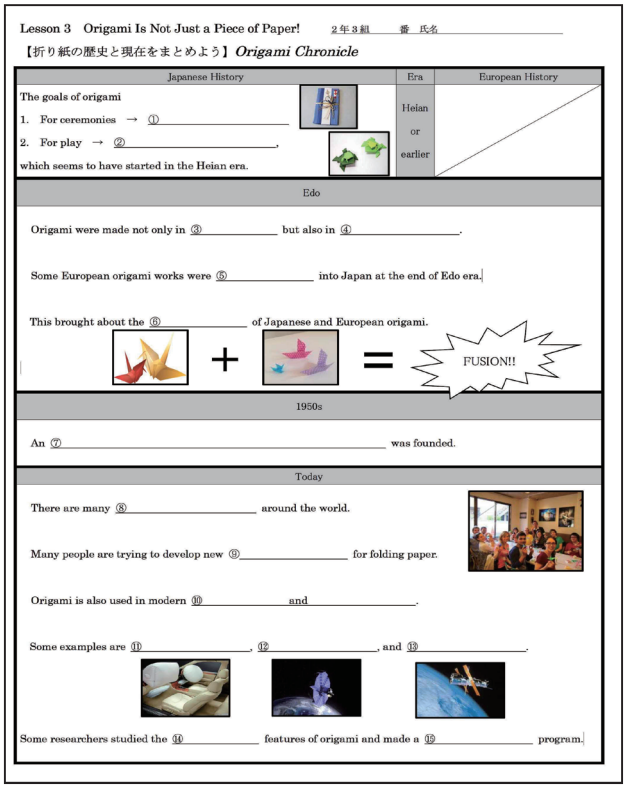
実践２（７時間目）

(1)　取り入れた「思考のすべ」とその意図：**関係付け（構造化）**

本単元では、全体を通して折り紙の発展とその活用例が述べられている。単元のまとめとして、年表のように工夫したワークシートを用いて、時間の流れに沿って単元全体の要約をさせる。

(2)　指導手順

① 単元すべてを通した音読活動を行い、単元全体の内容を復習させる。
② ワークシートの年表（**資料２**）を完成させる。
③ クラス全体で年表の空欄に入るキーワードを確認させる。



Lesson 3　Origami Is Not Just a Piece of Paper!　２年３組　　番　氏名

【折り紙の歴史と現在をまとめよう】*Origami Chronicle*

Japanese History	Era	European History
The goals of origami 1. For ceremonies → ① 2. For play → ② which seems to have started in the Heian era.	Heian or earlier	

Edo

Origami were made not only in ③ but also in ④.

Some European origami works were ⑤ into Japan at the end of Edo era.

This brought about the ⑥ of Japanese and European origami.

＋　＝　FUSION!!

1950s

An ⑦ was founded.

Today

There are many ⑧ around the world.

Many people are trying to develop new ⑨ for folding paper.

Origami is also used in modern ⑩ and ⑪.

Some examples are ⑫, ⑬, and ⑭.

Some researchers studied the ⑮ features of origami and made a ⑯ program.

資料２　折り紙の歴史をまとめるワークシート

授業実践2

〇単元名　Lesson　5　“Doctor in the Stomach”（総時間数８時間）

〇単元の目標

本文を読み、内視鏡や医療カプセルのような身体の内部から診察を行う技術が発展してきた経緯を理解する。また、より優れた製品を生み出すために従来の課題がどのように解決されてきたのかという視点を持ち、英文に書かれている内容を掘り下げて読むことで内容理解を深める。

実践３（６時間目）

(1) 使用した「思考のすべ」とその意図：**比較（視点を見いだす比較）**

本文には、内蔵カメラ付き医療カプセルに「昆虫のような脚」が付けられた具体的な理由が述べられていない。そこで、「思考のすべ（視点を見いだす比較）」を用いて、昆虫の脚に共通する特徴を挙げさせることにより、なぜ内蔵カメラ付き医療カプセルに「昆虫のような脚」が付けられたのかについて考えさせる。

(2) 指導手順

① グループを作り、本文の内容に関する問いに答えさせる。

#1 What is the weak point of the tiny camera?
#2 What does the walking capsule have?
#3 How does the walking capsule move?
#4 What can the walking capsule do?
#5 What can the doctors do with the walking capsule?

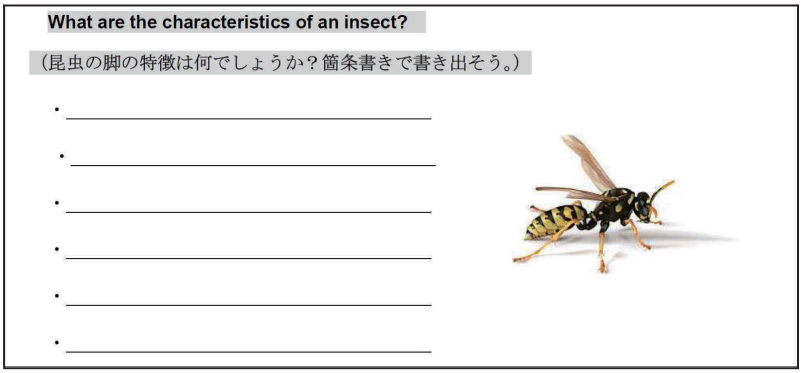
② 昆虫の脚に注目させ、特徴を挙げさせる。（**資料３**）

③ グループごとに昆虫の脚の特徴をいくつか発表させ、それらを板書してまとめる。

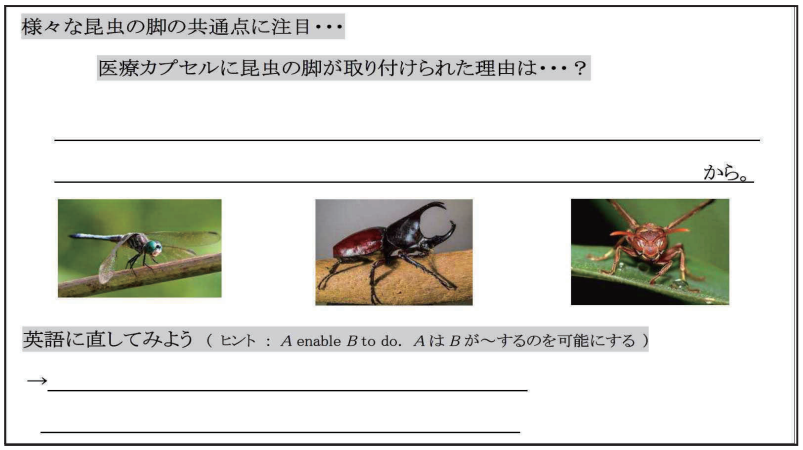
④ 黒板に書き出された特徴を踏まえ、なぜ「昆虫のような脚」が採用されたのかを考えさせ、その理由を日本語で書かせる。（**資料４**）

⑤ これまでに学習した語句や文法等の知識を使い、その理由を英語に直す。

⑥ グループ内で自分の書いた英語を発表させる。



資料３　昆虫の脚の特徴を考えるワークシートの一部



資料４　理由をまとめるワークシートの一部

成果

実践１では、既習の知識を活用させることで本文の内容をより深く理解させることを目指した。生徒は、教師が示す視点で複数の事柄を比較し、初めに読むときには気に留めなかったことに目を向けることができた。今後の課題は、生徒の学習到達度を踏まえた発問を工夫するとともに、視点の示し方のバリエーションを増やすことである。

また、実践後の反省として、本文には書かれていない「儀式」としての折り紙の起源を調べさせることを課題とし、調べた成果を次の授業で発表させる手順も考えられた。そうすることで、家庭学習の成果を授業で発表する機会となり、家庭学習と授業がつながると感じた。

実践２では、複数の事柄の関係を構造的に理解させるために、歴史上の出来事を時系列でまとめて、年表の形にして単元の本文全体を要約させた。生徒は年表を完成させるために本文を何度も繰り返し読むことで、本文の内容理解を深めることができた。今回の実践では教師が示した流れで出来事を構造化させたが、次のステップでは生徒自らが出来事の時間的な流れを表や図にまとめる活動を行い、学習したことを要約したり、発表したりするような活動へとつなげていくとより効果的であると考える。

実践３では、本文には明示されていない内容に対して「昆虫の脚」という特定のキーワードを提示し、その特徴を考えさせた。昆虫の脚の共通点を考えることで、生徒は新たな視点をもち、自分なりの予想のもと独自の意見を述べることができた。中には「関節がたくさんある」という、こちらが予想もしていなかった特徴を挙げる生徒もいた。生徒のそうした自由な発想を生かすことができれば、生徒の思考を深めることにつながると感じた。生徒が自由な発想で発言したり意見を出したりする活動を意味あるものにするために、教師側が事前に想定質問を準備しておく必要がある。そうすることで、授業中に生徒の発言や多様な意見をより多く引き出すことができ、生徒の発言や意見に対してさらに発問を重ねることで、生徒の思考をより深化させるとともに、多くのインタラクションを図ることができると考える。

これからの「思考力」の方向性

育成すべき資質・能力

◇「キー・コンピテンシー」　「２１世紀型スキル」

いま、様々な国や機関で「育成すべき資質・能力」を踏まえた教育の在り方についての研究が進められています。「育成すべき資質・能力」としては、例えば、ＯＥＣＤの「キー・コンピテンシー」やＡＴＣ21sの「21世紀型スキル」などが広く知られています。

◇「21世紀型能力」

日本の国立教育政策研究所も日本型モデルとして「21世紀型能力」を提唱しています。これは、「思考力」を中核として、それを支える「基礎力」と思考の方向性を決定する「実践力」を重層的に育むというものです。（図１）

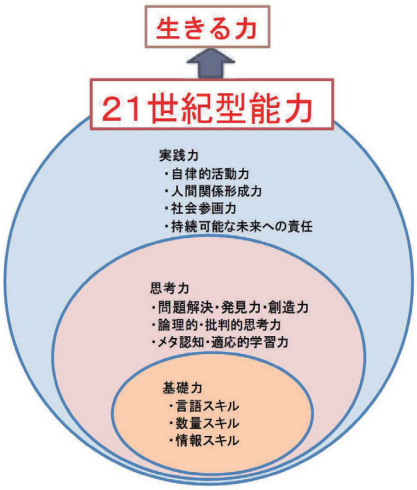


図１　21世紀型能力
（国立教育政策研究所のWebページより）

次期学習指導要領の方向性と思考力

平成28年12月に中央教育審議会から「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）が出されました。その中では、育成を目指す資質・能力の三つの柱（図２）を踏まえて、「何を教えるか」という学習内容の見直しだけでなく、「どのように学ぶか」という学びの質を高めることを重視しています。

具体的には、「アクティブ・ラーニング」の視点とも言われる、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の実現を求めています。特に「深い学び」とは、「習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう」学びです。本調査研究のテーマである「これからの思考力」を育む取組は、この「深い学び」の実現に通じるものと捉えることができます。

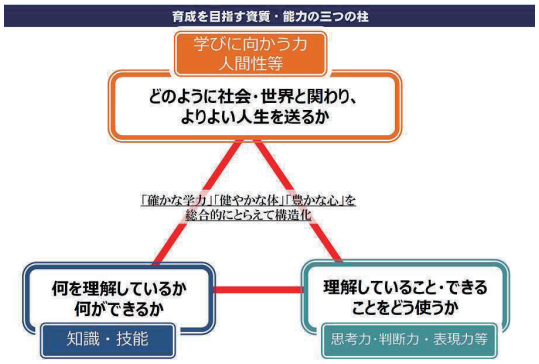


図２　育成を目指す資質・能力の三つの柱
（文部科学省Webページより）

栃木県総合教育センター（研究調査部）

〒320－0002
栃木県宇都宮市瓦谷町1070

電話：（０２８）　６６５－７２０４
FAX：（０２８）　６６５－７３０３

本事例についての詳細は、本調査研究のWebサイトを御覧ください。

栃木県総合教育センター｜
調査研究・報告｜教育課題に関する調査研究｜平成28年度調査研究　高等学校における教科指導の充実
http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/kyokasido_h28/index.htm